トロッコ列車「奥出雲おろち号」の旅

若槻智子・（イラスト）原田美恵子

皆さんは「奥出雲おろち号」をご存知ですか。これは、平成十年に木次線の木次―備後落合間で運転が開始されたトロッコ列車の名前です。トロッコ列車というのは、窓や屋根が取り払われていて、乗客が外気に触れることができるようになっている観光列車のことです。おろち号は、四月から十一月までの金・土・日・祝日（夏休みと紅葉の期間は毎日）に一日一往復運転されます。

私は小学生のとき、おろち号に乗ったことがありますが、そのときのことはあまりよく覚えていません。そこで今回の取材では、もう一度おろち号に乗車して奥出雲の魅力を探ることにしました。取材に同行してくれたのは、青木さんと原田さん。今回乗車したのは木次駅から三井野原駅までですが、おもに奥出雲町内の七つの駅を紹介します。

木次駅から下久野駅へ

七月二十三日（土）、午前九時三〇分木次駅に到着。しばらく駅の構内などを探索して、九時五五分ホームへ。

木次駅から三井野原駅までの十駅には、それぞれ神話にちなんだ愛称が付けられています。木次駅の愛称は八岐大蛇（やまたのおろち）です。ホームには、おろちの壁画やオブジェのほかに、「木次線歴史館」まであり、まさにおろち一色です。

一〇時過ぎ、おろち号がホームに滑り込んできました。おろち号は三両編成で、機関車とトロッコ列車、そして真ん中に雨風をしのげる控え列車が連結されています。車体は青と白に塗り分けられていて、星の模様が散らばっています。

座席やテーブルは木製で、車内はとても温かく優しい雰囲気が漂います。車内は満員で、お年寄りから若い学生まで老若男女を問わず幅広いお客さんが乗っていました。

定刻に木次駅を出発したおろち号は、日登駅（素戔嗚尊（すさのおのみこと））、そして下久野駅（動動（あよあよ））に停車します。田んぼのあぜ道や橋の上では、列車の写真を撮る「撮り鉄」たちがカメラを構えています。田ん

■（上段）出雲八代駅。駅舎とホーム。（下段）出雲三成駅。駅の上に見えるのは珍しい形をした吹き抜け。

ぼや畑で農作業中の人たちは、列車が来ると顔を上げて手を振ってくれます。

下久野駅を過ぎると、木次線で一番長い、全長二二四一メートルの下久野トンネルがあります。トンネルに入ると、車内中央の天井でおろちのイルミネーションが輝きだします。これもおろち号の呼び物のひとつとなっています。

レトロな雰囲気が残る出雲八代駅

トンネルを抜けてしばらくすると、出雲八代駅に着きます。この駅には、奇稲田姫の母神である手摩乳という愛称が付けられています。出雲八代駅は、いまでも昭和のレトロな雰囲気が残っている駅です。

駅の前には大きなシラカシの木が植えられていて、駅の入り口は大きな引き戸になっています。正面から見た駅は、古民家のようなたたずまいです。また、映画「砂の器」（一九七四年）では、この駅で亀嵩駅のホームのシーンが撮影されました。無人駅なので自由にホームまで行くことができ、映画のシーンにひたることが出来ます。

この駅では、列車の到着に合わせて「てなづちの里のクリーム大福」が販売されます。商品を入れた箱を首に下げた売り子さんが、ホームから窓越しに大福の包みを手渡してくれます。

このように、各駅ごとにさまざまな特産品を味わえるのも、おろち号の魅力のひとつです。

奥出雲の土産がそろう出雲三成駅

次は出雲三成駅です。この駅には大国主命という愛称が付けられています。駅舎は、遠くから見るとガラスの吹き抜けが目立つモダンな造りになっていて、コンビニと特産市が併設されています。また、国道三一四号線沿いにあるので車で立ち寄る人も多いうえに、朝夕は通学する高校生で溢れます。出雲三成駅は、奥出雲町内の駅の中ではもっとも賑やかな駅です。

地元の特産品を販売する「仁多特産市」では、地元で採れた野菜や生花などのほか、さまざまな食品や簸上酒造のお酒、忠善刃物の包丁などが販売されています。野菜や舞茸などは新鮮で安く、また奥出雲通の鹿野先生によると、おはぎと焼き鯖寿司は絶品だそうです。このお店は、観光客だけでなく地元の人もたくさん訪れるほどの人気です。

この駅から出雲横田駅までは、仁多米を使用した「笹ずし」の車内販売が行われています。

小説の舞台、亀嵩駅

次の駅は、小説「砂の器」の舞台となった亀嵩駅です。この駅の近くにある湯野神社には、大国主命と少彦名命が祀られているので、亀嵩駅の愛称は少彦名命となっています。駅の出札口は昔のまま残っていて、引き出しの中には今となっては珍しい硬券も積み重ねて置いてありました。

亀嵩駅の駅舎の中には、出雲そばのお店があります。昔の駅務室が、「扇屋」というそば屋さんになっているのです。店内には、映画関係者やその他多くの有名人のサインが飾られていて、そばを待つ時間も退屈しません。

そばは「割子そば」をいただきました。本格的な手打ちの出雲そばで、遠方からも人が訪れる理由がよくわかります。器にもこだわりがあり、有田焼を使用しているそうです。事前に予約をすると、列車の到着に合わせてホームで受け取ることもできます。

■扇屋の割子そば。

そばをいただいた後、扇屋の二代目の杠哲也さんにお話を聞きました。昭和四十六年、亀嵩駅は旧国鉄の合理化のために無人駅となりましたが、そのとき父親の隆吉さんが旧仁多町から駅長就任を頼まれました。

その当時、地元ではそばが消費されることはなく、そば粉は他の地域へと流出していました。農家だった隆吉さんは、近所の人が集まった時に何か食べられるような店を駅で開けないものかと考え、地元のそば粉を生かすことができるそば屋を開店することにしました。そば屋なら、切符の販売や荷物を預かる仕事の片手間でもできる、――そう決心した隆吉さんは、それから松江や出雲でそば修行をして、昭和四十八年に扇屋を開いたのだそうです。

しめ縄がかかる出雲横田駅

お腹も一杯になったところで、次に列車が向かうのは出雲横田駅です。この駅の愛称は、駅から南東へ一・五キロのところにある稲田神社にちなんで、奇稲田姫です。

出雲横田駅の魅力は、やはり何と言っても出雲大社を模して神社風に造られた駅舎です。ホームの出口と駅正面には、しめ縄がかけられています。特に駅正面

のしめ縄はずっしりと太く、風格が漂っています。このしめ縄は、昨年、十二年ぶりに地元の人たちによって新調されました。

なぜこのような駅舎にしたのかを駅員さんに尋ねると、出雲大社に祀られている大国主命は奇稲田姫の子孫にあたるという縁で、このような駅舎になったそうです。駅の向かって左側には稲田姫の像もあり、駅一帯が神話に満ちています。

暖簾がかかる八川駅

次は八川駅です。この駅の愛称は、奇稲田姫の父神である脚摩乳（あしなづち）です。

改札口には、地元の小学生によって作られた暖簾がかかっています。暖簾には、「ふるさと　やかわ　すき」という詩が書いてあります。ついつい口ずさみたくなる、地元への愛が溢れた詩でした。

八川駅の駅舎は、映画「砂の器」では亀嵩駅の駅舎として登場します。昭和のレトロな駅舎は、いまでも映画そのままに残っています。ここも無人駅なので、駅の中を探索してみました。「出札所」と書いてある小さな切符売り場の奥には、古い電話機やテレビなどが置いてありました。木を組んだ改札口も珍しく、手を伸ばして触ったり、通り抜けてみたり。何だか不思議な気分です。

駅のすぐ近くには「八川そば」というそば屋さんがあり、「トロッコ弁当」を列車の到着時に受け取ることができます。

■（上段）出雲横田駅。（下段）八川駅の改札口にかかる暖簾。

長寿の水を求めて出雲坂根駅

八川駅の次は出雲坂根駅です。愛称は天真名井（あめのまない）。この駅は昨年四月に駅舎が新しくなったばかりで、以前はなかったお土産などの売店ができていました。ホームの出口を過ぎると、名物の焼き鳥の甘くて香ばしい匂いが漂ってきます。

この駅で有名なのが、「延命水」です。延命水は、狸がこの水を飲んで百年生きたと伝えられる長寿の水です。おろち号に乗車していても延命水を汲めるようにと、この駅では停車時間が長くなっています。この日はとても暑かったので、延命水は冷たくて美味しかったです。

売店の前に延命水を汲む場所があり、その横には休憩用の東屋がつくってありました。何人かのお年寄りが、ブルーベリーを延命水で冷やしながら談笑していました。私たちが売店でお土産を見ていると、バスで観光客がどっと押し寄せてきました。手にはペットボトルを持ち、お目当ての延命水へと列をなしていました。

三段スイッチバック

出雲坂根駅を通過するとすぐに、木次線の魅力のひとつである「三段スイッチバック」に突入します。急勾配の山の斜面に線路が逆Z型に配置されており、前進しては後退して、高度差約一六二メートルを登っていきます。列車は元来た方向へ進み出し、緑の中をゆっくりと進んでいきました。坂根駅に見える人の姿も、徐々に小さくなっていきます。

車内では、数人が列車の先頭を占領して撮影していました。その様子をよく見ると、デジカメを動画へと切り替えて撮影していました。やはり、スイッチバックは静止画での撮影だけではもったいないようです。列車は途中で一度車庫に入り、車内は薄暗くなります。ここでもう一度方向を変えて進み始めます。車庫を出る瞬間に、一気に陽光が差し込みます。

スイッチバックを過ぎ、しばらくすると車内アナウンスがあり、三井野大橋が見えてきます。山奥の緑の中にそっと架かる真紅の橋に、車内から歓声が上がります。

■（上段）スイッチバック。さっき通った線路が下に見える。（下段）三井野大橋。

中国地方で最も高い三井野原駅

三井野大橋を過ぎると次は三井野原駅です。愛称は高天原（たかまがはら）です。というのも、三井野原駅はＪＲ西日本管内の駅のうち、最も高い標高七二七メートルの地点にあるからです。駅の周辺には三井野原

■ペットボトルに延命水を汲む原田さん。

■商品の説明をしてくださる松崎さん。

高原が広がり、高原野菜の産地であるとともに、冬にはスキー客で賑わいます。

三井野原駅も、出雲坂根駅と同時期に新しく建て替えられました。屋根は緑色、壁は山吹色の小さな駅です。駅舎の内側は赤く塗装され、窓枠とイスは白く、床は赤と白の水玉模様になっています。こんな可愛らしい駅が高原にポツリと建っている姿は、とても趣があります。冬の雪景色の中の駅も、ぜひ見てみたいものです。

おろち号の終点は備後落合駅ですが、私たちはここ三井野原駅で列車を降りました。別れ際に、同乗した人たちが手を振ってくれました。

列車を見送った後、出雲坂根駅から車内販売をされていた松崎きくえさんにお話を聞きました。車内販売では焼き鳥が一番の人気商品で、他にも仁多米のおにぎりや赤飯などもよく売れる、といったことを終始笑顔でお話ししてくださいました。ワゴンの上の商品を見ると、そば弁当やブルーベリーなど美味しそうなものが並んでいました。食べ物の他にも、おろち号のチョロQやしおりもありました。しおりは手作りで、しかも無料で配られています。松崎さんはこの後、出雲坂根駅まで戻って、売店で販売を続けるそうです。

トロッコ列車おろち号は、肌で風を感じることができ、トンネル内の音も迫力満点でした。そのうえ、乗客が一体感を共有することができる、なんとも不思議な空間でした。三井野大橋で湧き起こった歓声や、別れ際に手を振ってくれたことなどに、その一体感が表れています。

奥出雲の駅それぞれに個性があり、駅のたたずまいや雰囲気だけでなく、特産品や神話の世界を楽しむことができます。そして何よりも、そこで暮らす人びとと出会って、いろいろなお話を伺えることが、最大の魅力でした。

皆さんも、奥出雲の風景をおろち号に揺られながら楽しんでみてください。きっとそこには、新たな発見と出会いがたくさんあることでしょう。

（わかつき・ともこ／文化資源学系二年生）
（はらだ・みえこ／文化資源学系二年生）

■木次駅で商品ケースを持ち、移動販売する売り子さん。笑顔が素敵な方でした。

■長寿の水、延命水。冬は暖かく、夏は冷たいといわれています。

■これが有名な「おろちループ」。おろちを思わせる迫力ある橋です。

おおきくなあれ♪ トウガラシ

和泉早咲・飯塚美咲

今回私たちが訪れたのは鳥取県北栄町。六月九日、私たち六人は車で短大を出発し北栄町に向かいました。北栄町と言えばスイカ、長イモ、ブドウ、ラッキョウなどの栽培が盛んです。そのほかにも、名探偵コナンや風車等が有名です。

でも今回の目的は、これらのいずれでもありません。目的はトウガラシです。

■（上段）作業中のみなさん。（下段）育苗トレイ。

「えっ？　北栄町でトウガラシ？」と思われるかもしれませんが、作っているんです。規模はかなり小さいですが。トウガラシを取り上げるきっかけになったのは大山自然学校をやっておられる植田節明さんという方との出会いです。

筆者の一人、和泉は小さいころから植田さんに誘われ、ヤーコンの栽培を家族中で手伝っていました。その時はまだ小さかったので、なぜヤーコンを栽培しているのか分かりませんでした。今はトウガラシを栽培していますが、やはりなぜかわかりません。なぜこんなものを栽培しているのか、なぜ私の家族はそれを手伝っているのか、謎を解明すべく取材に出かけることにしました。

どうせなら作業日に合わせて取材に行こうということで、この日になりました。もちろん私たちも定植の手伝いをするつもりです。当日の天気は晴れ。日差しも強かったため私たちはみんな麦わら帽子を持って行きました。

午後一時ごろ現地に到着。車から降りると、二十人くらいの人が作業をしています。私たちもわくわくしながら畑の方に向かって歩き出しました。するといきなり事件。歩いている私たちに大量の水が降りかかってきたのです。私たちはキャーキャー言いながら逃げ回りました。畑に備え付けてあるスプリンクラーの仕業です。作業する前から服がびしょびしょになるという悲劇。そんなことがありながらも、植田さんから定植についての説明を受け、いざ作業開始！

■定植作業中の私たち（紫色のポロシャツ）。

育苗トレイを片手で持ち、もう片方の手で苗を一本一本畝の穴に落としていきました。それだけでも疲労感。次に苗を土に埋めていきます。これが体勢がとてもきつい。すぐに腰が痛くなりました。汗がしたたり、髪が邪魔して前が見えなくなり、この時点でもうスッピン状態。それでも私たちは黙々と作業を続けました。しかし暑さに体力を奪われ、二十～三十分ほどでギブアップ。ほんのちょっとしか作業していないのに、私たちはもうへとへとでした。他の方たちは、全く疲れた様子も見せず作業を行っておられます。体力の差に唖然とし

■大きくなあれ！

■（上段）インタビューに答えてくださった和泉百香さん（右端）。（中段）福山喬之さん。（下段）岩本弘美さん（右端）。

ました。

休憩時間に、私たちは今日の作業参加者たちにお話を伺ってまわりました。まずは、私たちと同世代の和泉百香さんのお話を伺いました。

「なぜ、この定植に参加しておられるのですか？」

「私が働いている会社の仕事のひとつだからです」

「今回が初めての参加ですか？」

「いや、小学生の頃から手伝っています」

というわけで、実はこの人は筆者の一人、和泉の妹だったのです。彼女は、ここでできたトウガラシの販売先、祇園味幸に勤めています。次にお話を伺った福山喬之さんも私たちと同年代の人です。

「作業は大変ですか？」

「一緒に作業する人たちが良い人ばかりなので、休憩中にお話ししたりするのが楽しいです」

福山さんはセンコースクールファームの方で、普段は主にハウスの中で野菜の水耕栽培を行っているそうです。最後に岩本弘美さんにお話を伺いました。

「去年もこのトウガラシ栽培に参加されましたか？」

「いいえ、今回が初めてです」

「作業をしてみてどうですか？」

「とても大変です。定植作業は足腰にくるので体力的にもきついです」

岩本さんは「苗はまるで自分の子どものようです。元気に育ってほしいと思いながら植えています」とおっしゃっていました。

さてこれまでに、大山自然学校、祇園味幸、センコースクールファームと、いろいろな組織名が出てきました。このトウガラシ栽培にはいろいろな組織が関わっていて、なかなか複雑です。ちょっと聞いただけではチンプンカンプンだったので、お隣の湯梨浜町にあるセンコースクールファームに移動し、そこで植田さんから詳しいお話を伺うことになりました。

目的地に近付くにつれて、学校のような大きな建物が目に入ってきました。壁には「センコースクールファーム」の大きな文字が。中に入ってみるとバリアフリーになっています。驚きました。

大山自然学校は農業、医療、スポーツの分野を繋げるさまざまな事業を行っています。先ほど出てきたヤーコンは健康食品のひとつとして栽培され、大山の麓で合宿するスポーツ選手の食事にヤーコンを取り入れ、彼らの健康づくりに役立てようという目的を持っていました。

トウガラシも体によい食品です。トウガラシにはカプサイシンという成分が多く含まれていて、成人病を食い止める効果があると言われています。でも、トウガラシの栽培を始めた理由はそれだけではありません。このトウガラシの栽培を障がい者や高齢者にやってもらうことで、彼らに働く場を提供しています。農業と医療とスポーツのほかに、さらに福祉を結びつけようとしているわけです。

センコースクールファームは、大阪にあるセンコーという運送会社の

特例子会社です。特例子会社とは、障がい者の雇用に特別な配慮をした子会社のことだそうです。センコーは二〇一〇年四月、湯梨浜町にセンコースクールファーム鳥取を設立しました。建物は二〇〇六年に廃校となった羽合西小学校の校舎を利用しています。センコースクールファーム鳥取の取り組みは全国の自治体や企業から注目されているようです。センコースクールファーム鳥取は、以前グラウンドだった場所で野菜の水耕栽培を行ったり、教室として使用されていた部屋できのこの菌床栽培を行ったりしています。教室は温度、湿度管理がうまくできるように改造されています。センコースクールファーム鳥取の従業員の方たちは、自分の会社で仕事をするだけでなく、今回のトウガラシ定植作業のように、よその仕事を引き受けたりもしています。

■皆さんと記念撮影。

トウガラシの栽培を実際に運営しているのは桑原農園です。桑原敏光さんという方がやっておられますが、ここでは「バザー農業」と呼ばれる独特の方法でトウガラシ栽培を行っています。

作り手のいなくなった土地を借り、使わなくなった農機具を借りたり持ち寄ったりし、投資を極力抑えるやり方です。また、トウガラシは乾燥して出荷するので乾燥施設が必要となってきます。北条町では以前から、タバコの栽培が行われてきましたが、近年タバコ農家が減り、使われなくなった乾燥施設があります。これを借り受けてトウガラシの乾燥に利用しています。作ったトウガラシは乾燥だけでなく粉砕もして、祇園味幸という会社に引き渡します。

祇園味幸とは京都にある薬味製造販売会社です。現在、日本のトウガラシ需要の大部分は輸入物に頼っていますが、祇園味幸では国内原料の調達に力を入れ、全国各地で栽培契約を行っています。栽培契約とは、前もって価格・数量を取り決め、生産物ができたら契約した条件で買い取ることで、作る側も安定しているので作りやすいそうです。

トウガラシ作りは今年で四年目に突入していると伺いました。このような取り組みが全国各地で行われれば、食材を輸入に頼ることも少なくなってくると思います。また、障がい者や高齢者に働く場を提供することで、彼らの生きがいにもなるのではないでしょうか。私たちはなぜ北栄町でトウガラシの栽培が行われているのか全く分からなかったのですが、今回の取材で少し見えてきたような気がします。私たちはトウガラシ栽培の行く末がとても気になりました。

（いずみ・さき／文化資源学系二年生）
（いいつか・みさき／文化資源学系二年生）

■（上段）インタビューの様子。（左から）桑原さん、植田さん、取材メンバー。（下段）看板の前で記念写真。

ヤマタノオロチの伝承地探訪

原田真里
鹿野一厚

■温泉神社。

私たちは、卒業研究で「ヤマタノオロチの文化資源学」に取り組んでいます。簡単に言うと、ヤマタノオロチ伝説がどのように観光や地域おこしに活用されているのかを調べようというものです。そのためには、まずヤマタノオロチ伝説について知らなくてはなりません。

ということで、有名な「ヤマタノオロチ伝承地探訪ツアー」に申し込んだのですが、希望者が多くて締め切りましたとのこと。そこで、ちょっと贅沢だけど、ジャンボタクシーに観光ガイドさんを別途つけてもらって、じっくりと伝承地を巡ることにしました。

七月十八日、快晴。私たち鹿野ゼミのメンバーは、雲南市のJR木次駅を訪れました。ここでタクシーに乗り込みます。運転手は名原さん、ガイドは藤原さんです。

スサノヲノミコト（須佐之男命、素戔嗚尊、以下「スサノヲ」と略）は、高天原から追われて鳥髪山（鳥上山、船通山）に天降りました。ここでは、私たちがツアーで訪ねた場所を、①ヤマタノオロチ（八俣遠呂智、八岐大蛇、以下「オロチ」と略）との戦い前夜の伝承地、②スサノヲとオロチの戦いにまつわる伝承地、③オロチを退治した後のスサノヲにまつわる伝承地、の三つに分けて紹介します。

①オロチとの戦い前夜

雲南市には、クシナダヒメ（櫛名田比売、奇稲田姫）の父母神である足名椎（あしなづち）と手名椎（てなづち）にまつわる伝承地がありました。「温泉神社」や「長者の福竹」がその例です。

木次町湯村にある「温泉神社」は、『出雲國風土記』（以下『風土記』と略）に「漆仁（しつに）社」として記載されている神社です。この神社から約八百メートル南西には、同じく『風土記』に「薬湯」と記されている湯村温泉があります。

この温泉神社の境内には、足名椎と手名椎の神陵（二つの岩です）が祀られています。案内板によると、足名椎と手名椎は、後述する天が淵東方にある万歳山（ぼんざいさん）の麓に住んでいて、神陵ももとは万歳山の中腹にあったのだそうです。一七一七年に編纂された『雲陽誌』の大原郡西日登の条に「國神社」とありますが、これがもとの社を指していると考えられます。

万歳山のさらに東方、芦原地区の山中にある「長者の福竹」は、ガイドの藤原さんによると、足名椎、手名椎とクシナダヒメがオロチの危害から逃れるとき、この地に立ち寄って休憩した場所だそうです。その際、使っていた竹の杖を地面に立てたところ、杖から根が出たので「長者の福竹」と名付けられたとのことでした。この話は、『雲陽誌』にも出てこない話です。

オロチ伝説の地として極めつけは、オロチの棲み処「天が淵（あまふち）」です。国道

■オロチの棲み処、天が淵。恐る恐るのぞき込む取材メンバー。

三一四号線沿いにあり、「天が淵公園」として整備されています。住所は雲南市木次町湯村で、前述した温泉神社は南へ六〇〇メートルしか離れていません。天が淵が文献に登場するのは、一五二三年の『雲州樋河上天淵記』が最初とのことでした。

斐伊川はこのあたりで大きく左に蛇行しますが、天が淵はちょうどその曲がり角にあります。川幅は十八メートル前後で、それほど広いとは感じませんが、藤原さんによると、右岸の岩の下には奥行きの知れない穴があるのだそうです。すぐ東側は道路を隔てて崖になっており、その上が万歳山にあたります。昔、万歳山麓にある養善寺の井戸に落とした杓子が、何日か後にこの天が淵に出てきたのだとか……。いまでもオロチが潜んでいるかもと、少し心が騒ぎました。

■（右上段・下段）印瀬の壷神。（左上段）西日登の八口神社の境内に残る幣串。（左下段）こちらは加茂町神原の八口神社。

②スサノヲ対オロチの古戦場

雲南市には、スサノヲとオロチの戦いにまつわる伝承地も数多く残されています。

「八口神社」（木次町西日登瀬ノ谷）は、木次線日登駅の南西約三キロの山中にあります。国道三一四号線を南下すると、西日登小学校を過ぎて次の道を左折します。しばらく進むと、戸数七戸の印瀬集落に着きます。集落内の未舗装の細い道をたどると、その突き当たりに八口神社はありました。

オロチとの戦いに備えて、スサノヲは足名椎、手名椎に「八塩折の酒」を造らせ、廻らした垣の八つの門それぞれに、八塩折の酒を満たした酒船（酒槽）を置かせました。『古事記』の名場面です。八口神社の「壷神由緒」によると、この八塩折の酒を満たした酒槽の一つが、八口神社の境内にある「印瀬の壷神」なのだそうです。（ちなみに、このことは『雲陽誌』西日登の八口神社の項には書いてありません。）

錦織良成監督の映画『うん、何？』にも描かれていますが、この壷に触れると天変地異が起こると信じられており、「多くの石で壷をおおい玉垣で囲み、注連縄をめぐらし」てあります。いまでも旧暦の六月三十日には「壷神祭り」がおこなわれ、境内の周囲の八ヵ所に幣と供物をささげるそうです。私たちが行ったときにも、幣を立てた跡がいくつか残っており、どこからかオロチがやって来そうな気配が漂っていました。

加茂町下神原にも、「八口神社」があります。こちらの神社は、『風土記』に「矢口社」と記載されている神社です。県道一九七号線に沿って斐伊川の右岸を北上し、斐伊川が赤川（大東から流れてくる）と合流するあたりが下神原です。

神社の案内板によると、「大蛇が八塩折の酒に酔い草枕山を枕に伏せっているところを、（須佐之）男命が矢をもって射られた」ので、矢口社と名付けられたそうです。またこの神社がある場所は、「須佐之男命が八岐大蛇の八つの頭を斬られた」場所、つまりオロチを十拳剣で切り裂いた場所でもあるので、「八口大明神」とも呼ばれているそうです。

スサノヲがオロチに矢を射る話は、『古事記』にも『日本書紀』にも出てこない話です。『雲陽誌』「神原の矢口大明神」の項にも、スサノヲがオロチの「八の頭を斬たまふ」とは書いてありますが、や

■オロチが枕にした草枕山。江戸時代に切り開いて赤川を通した。

■スサノヲがオロチの尾を開いた尾留大明神。

■（右）木次町里方の八本杉。（左）須我神社。

はり矢を射る話は出てきません。そのような話がいまも語られていることに、この地に根づいた伝説の底知れぬ奥深さを感じました。

八口神社の北西にある山が、オロチが八塩折の酒に酔って寝ていた「草枕山」です。このことは、『雲陽誌』に記述があります。この山は昔はもっと高かったのですが、赤川の氾濫にたまりかねた人びとが、江戸時代（安政年間）に赤川の流れを北向きに変えるために、山を切り開いて低くしたのだそうです。毎年氾濫する暴れ川・斐伊川こそがヤマタノオロチにほかならないとする説が、現実のものとして迫ってくる話です。

下神原の八口神社から約一・七キロ南東の加茂町三代（みしろ）には、スサノヲがオロチの尾を開いて「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」を得たとされる「尾留大明神（おとめだいみょうじん）」があります。

さらに斐伊川を約三キロ遡った木次町里方には、スサノヲがオロチの頭を埋めたとされる「八本杉」があります。この地には、スサノヲが植えたと伝えられる八本の大杉が茂っていましたが、江戸時代初期の大洪水で流されました。その後も何回か植え直しては流され、現在の八本杉は明治六年（一八七三年）に新しく植えられたものだそうです。杉の巨木を思い描いていた私たちは少し拍子抜けしましたが、同じ場所に何度も杉を植え直す人びとの営みに、オロチ伝説がいまも人びとの心の中に生きていることを実感しました。

③オロチ退治以後

オロチを退治したスサノヲは、『古事記』によると「新居の宮を造るべき土地」を捜して須賀の地（現在の大東町須賀）にやって来て、須賀の宮を造りました。この宮が日本初の宮と呼ばれる「須我神社」ですが、『古事記』に登場するお宮がいまでもその地に存在することは、えも言われぬリアリティーをオロチ伝説に与えています。

私たちは、須我神社から約二キロ北東にある奥の宮にも行きました。車で八雲山登山口まで行って、そこから徒歩で約十五分登ったところに、大きな岩が三つ鎮座していました。それぞれ、スサノヲとクシナダヒメとその子神が祀られていて、注連縄を張って幣が立ててあります。このように巨石や巨木などがそのまま祀られているのは、神社の原初の姿であると言われています。もしかしたら、『古事記』以前の信仰の姿が、いまに残されているのかもしれません。

ここには書ききれませんでしたが、私たちはこの他にも、スサノヲが箸を拾った地とされる木次町新市の「八岐大蛇公園」、スサノヲが木の枝を頭に挿して踊ったとされる「佐世神社」などを案内していただきました。全部で十二ヵ所になります。

一日かけて、木次町、加茂町から大東町におよぶ伝承地を訪ねてみて、ヤマタノオロチ伝説が頭の中で立体的にイメージできるようになりました。『古事記』や『日本書紀』には出てこないたくさんの話が、実際の場所と結びつきながら鮮明に語られ続けています。スサノヲとオロチの伝説は、いまでもこの地の人びとの心に息づいているのです。スサノヲもオロチも人びとに愛されている、そんなことをこの旅で実感しました。

（はらだ・まり／文化資源学系二年生）
（しかの・かずひろ／総合文化学科教員＊生態人類学）

■（上段）須我神社奥の宮。（中段）佐世神社のシイノキ。（下段）八岐大蛇公園。

■木次駅で記念写真。

Ｊリーグのクラブを目指して
～松江シティフットボールクラブ～

石川紗穂
山本流美

■（右）松江シティＦＣのエンブレム。（左）廣瀬監督。

私たちがサッカーの記事を書こうと思ったきっかけは、サッカーが好きだからという軽い理由からでした。それでも、せっかく取材するなら「Ｊリーグを目指している本格的なチーム」をと思っていました。そこで、「松江＆サッカーチーム」と検索したところ、「松江シティフットボールクラブ（以下、「松江シティＦＣ」と略）」がヒットしました。

松江シティＦＣ公式ＨＰをのぞくと、ホームグラウンドは私たちの短大の目と鼻の先にある松江総合運動公園であることが判明しました。こんなに近いのに、今まで全然知りませんでした。そのお詫びの気持ちもこめて、私たちは松江シティＦＣを取材することに決めました。

今回取材を受けてくださったのは、廣瀬康彦監督、小川秀樹コーチ、キャプテンの吉岡優さん、副キャプテン松本弘樹さん、フォワードの尾島徹哉さん、スタッフの荒子光晴さんと岩田輝さん、そしてサポーターの城田博之さんと野坂秀和さんです。

チーム紹介

松江シティＦＣは社会人のサッカークラブで、「中国サッカーリーグ」に所属しています。日本サッカーのリーグは、Ｊ１、Ｊ２の下にＪＦＬがあり、その下に地域社会人リーグがあるという構成になっています。中国サッカーリーグは、中国地方の地域社会人リーグです。

松江シティＦＣの出発は、一九六八年に誕生した「松江ＲＭクラブ」です。二〇〇八年には「ヴォラドール松江」（ヴォラドールはスペイン語のトビウオ）と改名しました。ヴォラドール松江は二年連続して島根県社会人サッカーリーグ１部で優勝し、二〇一〇年から中国サッカーリーグに昇格しました。

二〇一一年からは、島根県サッカー協会松江支部によるサポートを受けて、運営組織を整えるとともに「松江シティフットボールクラブ」と名前も一新しました。活動拠点である松江市との結びつきを強調したのだそうです。

サッカー中心の生活

松江シティＦＣは、アマチュアのチームです。したがって、選手たちは昼間会社などで仕事をしながら、いわばその空き時間を利用してサッカーに励んでいます。

仕事とサッカーの両立について、インタビューした三人は「融通はきかせてもらってる」と答えてくれました。仕事のローテーションの都合をつけてもらったり、試合がある日には仕事を休ませてもらったりしているそうです。皆さん、周囲の人たちの理解を得る努力をしているのです。

■スタッフの荒子さん（左）と岩田さん（右）。

しかし、ときには理解を得ることが難しいこともあります。サポーターの野坂さんから聞いた話ですが、ある選手が夜勤明けで試合に臨まないといけなくなったそうです。その選手は、徹夜をしたのにそのまま自分で車を運転して、コンディション調整もままならないまま試合に出場しました。それにもかかわらず、なんと彼は試合でゴールを決め、大活躍したそうですが……。

時間のやり繰りだけでなく、選手たちはお金のやり繰りもしないといけません。年間四万円の部費はもちろんのこと、遠征するときの交通費や宿泊費まで、選手たちが自己負担しているのです。廣瀬監督のお話によると、選手たちはもちろんそのことを納得しているし、それを我慢できる強い選手ばかりが集まっているそうです。

インタビューの最後に、選手三人に「趣味は何ですか」と伺ったところ、しばらく考えた後、「何も趣味はない。強いていえばサッカーが趣味かな」という答えが返ってきました。趣味に割く時間がないほど、仕事以外の時間はサッカーに取り組んでいるのだそうです。やはり選手たちはサッカーが大好きなのですね。だからこそ、さまざまな困難や負担をものともせずに、サッカー中心の生活を送ることができるのだと納得しました。

選手の意識が変わった

松江シティＦＣは、将来はＪリーグ入りを目指す本格的なサッカーチームです。しかし廣瀬監督によると、以前は上を目指せるようなチームではなかったそうです。三年前までは「選手は全然走ろうとしなかった」そうで、練習で選手に走ることを要求したら、「監督が走れ」と言い返されたそうです。

二〇〇八年、島根県社会人リーグで優勝したヴォラドール松江は、全国の強豪と対戦する機会がありました。そのとき、相手の走力について行けずに、結局その試合に負けてしまいましたが、この試合がきっかけとなって、選手自身が走ることの大切さに気づいたのだそうです。いまでは、小川コーチが「選手たちはサッカーに対して一生懸命なので、まだまだこれから伸びる」と言うほど成長しています。

■試合前の練習風景。

■（左）小川コーチ。（上）松江シティＦＣの魅力を楽しそうに話すサポーターの野坂さん（左）と城田さん（右）。

スタッフの荒子さんも、「選手たちが変わってきてくれている。やる気も出て、人として成長している」と語ります。サッカーに取り組む姿勢を通して、選手たちの成長がスタッフやサポーターにも伝わり、そのことがスタッフやサポーターのさらなる支援につながる、という好循環がチームに生じているのです。

チームを支える人びと

二〇一一年から新たに小川コーチが参加して、Ｊリーグを目指す体制が強化されました。去年までは廣瀬監督が指導を行っていたのですが、今年からは、サッカーの技術や戦術の指導はおもに小川コーチが行い、廣瀬監督はチームのサポート役にまわっています。

松江シティＦＣには現在選手が二十一人いますが、試合に出場できるのは十一人です。以前は、せっかく来たのに試合に出られなくて、怒って帰ってしまう選手もいたそうです。

いまでは、そんな選手たち一人ひとりに廣瀬監督が寄り添い、選手たちの話を聞いて心のケアをしています。廣瀬監督は、自分を「監督らしくない監督」と評していましたが、サポート役を楽しんでいることが伝わってきました。

また、選手たちから「戦術家」と評される小川コーチも、選手との間に距離を置いて接することはせず、「選手とコーチが入り込めて互いに言い合えるベース作り」を大切にしています。よく選手たちと一緒に食事にも出かけるそうです。

このようにして、松江シティＦＣの監督・コーチと選手たちとの距離は、とても近く保たれているのです。選手たちへのアンケートには、監督とコーチは「チームメイトみたいな感じ」「とても親しみやすい」という意見が多くあり、チーム全体が一つにまとまっていることがうかがえます。

■試合風景。

そんなチームを、スタッフたちは内側から支えています。選手たちがサッカーに専念できるように、資金を含めた運営全般を引き受けているのです。そして、将来ＪＦＬ、そしてＪリーグでも戦うことができるような組織を、いまのうちからつくり始めているのだそうです。

最後に、チームを外側から支えるサポーターの役割も重要です。城田さんと野坂さんは、松江だけでなく広島や岡山などへも遠征して、ほぼすべての試合に駆けつけています。太鼓を打ちながら自作のチャント（チームや選手の応援歌）を歌って、熱烈に応援を続けています。サポーターの応援が、選手たちのモチベーションを高めているのです。

やる気のある選手たちに思いやりのある監督とコーチ、そしてそんなチームを支えるスタッフとサポーター。松江シティＦＣがＪリーグを目指して進んでいくためには、いずれもなくてはならない車の四つの車輪なのです。

サポーター側では現在、城田さんが中心となって、一緒に応援してくれる仲間を募集しています。スネア（小太鼓）を叩ける人などもいたら嬉しいそうです。

松江シティＦＣのメンバー

	背番号	氏名（年齢）	出身地
監督	—	廣瀬康彦（42）	鳥取県境港市
コーチ	—	小川秀樹（—）	—
GK	31	伊藤　淳（26）	島根県出雲市
DF	5	吉岡　優（28）	島根県
	2	油木智弘（24）	鳥取県米子市
	3	須山雄太（25）	島根県松江市
	4	岩谷直人（28）	島根県松江市
	6	石橋貴宏（23）	島根県
	11	森田裕介（33）	—
	13	佐藤友馬（30）	島根県松江市
MF	7	松本弘樹（28）	島根県松江市
	8	樋口富夫（26）	島根県松江市
	9	森　基紀（23）	島根県松江市
	14	石倉大輔（28）	島根県
	17	福島　学（31）	島根県
	18	小川　優（25）	島根県
	20	岩崎遼太（24）	島根県安来市
	23	河本大空（20）	鳥取県
	28	大野卓也（36）	島根県松江市
FW	10	澁山雄希（24）	鳥取県
	15	小野直樹（21）	広島県
	21	尾島徹哉（24）	島根県松江市
	32	小松寛規（25）	—

松江シティＦＣの魅力

私たちは、今回の取材をする前、天皇杯島根県大会の準決勝を観戦しました。松江シティＦＣと松江南高校との対戦で、結果は６—０で松江シティＦＣの快勝でした。ワンタッチでボールがつながっていて、かなりレベルの高いサッカーをしていると感じました。こんな本格的なサッカーをするチームが松江にあることに、感動すら覚えました。

生で見るサッカーは、迫力が全然違います。テレビでは伝わりにくいスピードを感じることができますし、ボールを蹴る音や、選手たち同士の大きな掛け声などが鮮明に聞こえます。また、サポーターと一緒に応援すると、チームとの一体感を味わうこともできます。時にはボールが応援席まで飛んできて、冷や汗タラタラということもありますが……。

サポーターの城田さんと野坂さんは二人とも口をそろえて、選手たちとサポーターとの距離の近さも松江シティＦＣの魅力だと言います。比較的スタンドが小さい競技場で試合が行われるので、試合が終わると観客のすぐ近くに選手たちがやってきてくれます。

私たちは、今回取材をしてみて、松江にこんな本格的なサッカーチームがあることをはじめて知りました。皆さんの中には、島根にこのようなチームがあることを知らない人もたくさんいると思います。そんなあなたでも、ぜひ一度、松江シティＦＣの試合を観戦してみてください。そうしたら、あなたもきっと、私たちと同じように、松江シティＦＣが大好きになること請け合いです。

最後に、松江シティＦＣでは、スタッフやトレーナー（どちらもボランティア）を募集しています。興味のある方は、松江シティＦＣ公式ＨＰのスタッフ募集のページまで。

（いしかわ・さほ／日本語文化系一年生）
（やまもと・るみ／日本語文化系一年生）

■後列左から松本さん、吉岡さん、　尾島さん。
前列の二人は取材メンバー。